特 集

高齢期の新しいつながりの模索—グローバル化・個人化と家族

介護をめぐる高齢者と家族

—地域福祉実践を通じて—

山王丸由紀子

要 約

本稿の目的は、高齢化の進む大阪市中心部で地域密着型の事業を展開する介護系 NPO 法人フェリスモンテの活動を紹介するとともに、その実践の経験に基づいて、介護サービス利用をめぐる要介護高齢者とその家族の関係を考察することである。一般的には、高齢者とその家族との間に良好な関係が結ばれている場合に良好なサービス利用が促進されやすいものの、NPO スタッフと高齢者とのかわりのなかで家族関係が良好な方向に再構築される場合もある。地域に密着した介護事業の展開においては、家族関係を代替する方向ではなく、高齢者の介護をめぐる家族と地域の新しい関係を築いていくことが求められている。実践と研究の交流を通じてそうした関係づくりのための知見が深められることが期待される。

キーワード: 介護系 NPO 法人, コミュニティ, 家族関係の再構築

2010, 家族社会学研究, 22(1): 23-29

Reconstructing the Caring Relationships between Frail Elderly and Their Families: An Exploration of a Community-based NPO

Yukiko Sannoumaru

Abstract

This article explores the caring relationships between frail parents and their families, examining the experience of *Felis Monte*, a community-based NPO in Osaka City that provides the frail elderly with care/social services. Findings indicated that good relationships between the frail elderly and their families facilitate the appropriate use of care services. At the same time, not a few cases were observed in which the receipt of care services improved the prior relationships between the elderly and their families. The article suggests that it is necessary for the practice of community-based care provision to reconstruct caring relationships between the families and various actors in the community.

Key words: Care-Providing NPOs (Non-Profit Organizations), community, reconstruction of family relationships

2010, Japanese Journal of Family Sociology, 22(1): 23-29

I. はじめに

筆者は、大阪市内の介護系 NPO 法人「フェリスモンテ」の代表として、10 年にわたって活動を行ってきた。私たちの実践の特徴を一言で言い表すならば、「地域密着型」ということに尽きるだろう。私たちは、地域での活動実践のなかで、高齢者の方々とその家族と深いかかわりがある。そのなかで高齢者を取り巻く家族について、多くのことを見聞きし、考える機会をもってきた。私たちの活動から得られた知見を一般化するつもりはないが、高齢化の進む都市部で地域に根ざした高齢者福祉を展開するための方法を考えるとき、私たちの経験は他の地域にも示唆を与えることがあるかもしれない。私たちは研究者ではないため、体系化された知見を提示できるわけではないが、本稿では私たちの取り組みに根ざした発見を報告してみたい。理論的な視点も踏まえた研究者からのフィードバックが得られることで、研究や実践に何らかの貢献ができるとすれば、こうした報告の意義も小さくないと考える。研究と実践の対話を通じて得られた知識は、また実践に活かしていくことも可能になるだろう。

以下では、私たちの活動実践を紹介したうえで、要介護高齢者をめぐる家族関係に注目しながらいくつかの事例を類型別に紹介し、事例に基づいた考察を提示してみたい。

II. 「フェリスモンテ」設立の経緯

筆者が代表を務めるフェリスモンテは大阪市の旭区千林（せんばやし）にある NPO 法人である。平成 11 年から活動を始め、今年で 10 年になる。フェリスモンテとは「幸せの山」という意味で、地域に合った幸せの山を築いていきたいという思いが込められている。

フェリスモンテを立ち上げたきっかけは、私自身が自分の父親を介護し、そこでの悩みから、「ボケの会」という勉強会に参加したことであった。勉強会の仲間たちとのかかわりを通じて、「私た

ち団塊の世代は、自宅で親を看取る最後の世代、子どもには看てもらえない最初の世代。だから、ずっと住んできた千林で最後まで暮らすためには、高齢者が自宅のように安心して暮らせるグループハウスが必要ではないか」というアイデアが浮かんだのである。

高齢期の介護を地域でお互いに助け合う仕組みとしてのグループハウス（私たちは、「賄い付きの高齢者下宿」と呼んでいる）を作りたいと考え、フェリスモンテを作ったのが 10 年前のことである。当初はボランティアベースのサロン活動をしていたが、介護保険制度をきっかけに法人化し、平成 12 年から介護保険事業に参入した。事業に参入したのは、経営を安定させることがグループハウスの可能性を高める道だと考えたからである。

私が生まれ育ち、フェリスモンテが活動する千林地区は、活気のある千林商店街で有名な商人の街である。家屋が密集しており、大阪市の中でも高齢化率は高い。戦災を受けておらず、古くからの住人が多い街であり、今でも三世同居が珍しくない土地柄である（私自身、私と娘は同じ小学校に通っていた）。太子橋（コミュニティカフェがある）は千林と同じ中学校区にあるが、もう少し高級な住宅街である。この両地区で正職員 8 名が働く。千林の隣の中学校となる中宮では、居宅介護支援やグループハウスの事業を展開しており、正職員が 7 名いる。ここでの地域とのつながりは相対的に弱い地区である。最後に、旭区とは離れた生野区の今里（いまざと）にももう一つの活動拠点があり、訪問介護や生活支援型食事サービスなどを行っている（正職員 6 名）。生野区は大阪市内で二番目に高齢化率が高いと同時に、在日韓国・朝鮮籍の人口が半分を占めているという特殊な地域である。

これら地域でフェリスモンテは、以下のような介護関連サービスをしている。介護保険事業の対象となるサービスとしてはケアプラン（居宅介護支援）、ヘルパー派遣（訪問介護）、デイサービス

図1

(通所介護)がある。そのほかの、もともと地域で最初に始めたのが、サロン活動(「おたっしやサロン」。高齢者に会員の家に来てもらい、そこで高齢者の知恵をもらう交流活動)、福祉有償運送(車両での病院への移送)、配食サービス(大阪市からの受託事業。お弁当を届けて安否確認を行う)、コミュニティ喫茶(居場所作り)、グループハウス

(これがもともとの活動目的)である。事業規模でみると、平成11年度には39万円の自主事業しかなかったが、ヘルパー派遣の介護保険指定を契機に順調に規模を拡大し、平成21年時点で約2億2500万円に達している(図1を参照)。

III. 要介護高齢者とその家族： 実践で出会った事例から

私たちがかわかってきた高齢者は数多いが、ここでは、ある観点から事例を類型化したとき、それぞれの典型と考えられる事例を紹介してみたい。その観点とは、「介護サービスの利用をきっかけに家族関係がどのように変化したか」というものである。多くの事例を分類してみると、①家族関係の良好な変化が見られる事例、②家族関係に変化が見られない事例、③家族関係の変化の方向性を判断しがたい事例、に分けることができると思う。もちろんこれは大まかな分類であり、すべての事例がうまく分類できるわけではないが、私たちにとっては実践のなかで意味をもつ類型化である（*プライバシー保護のため、以下はすべてイニシャルで表記する。また、事例が特定されることを避けるために、必要に応じて事実関係を部分的に変更していることをお断りしておきたい）。

1. 介護をきっかけとして家族関係に変化が見られた事例

まず、介護サービスの利用をきっかけに家族の関係に変化が見られたと考えられる事例を紹介する。

(1) U夫妻は、ともに80代で夫婦二人で暮らしていた。夫の介護度は重度であり、ヘルパー派遣などを利用していた。気位の高い、きっちりした性格の妻であった。サービス利用を始めた時点では、夫婦二人暮らしと話していたが、実はあるときから50代の離婚した息子さんが家に帰ってきていたことが途中で判明した。息子は失業中らしく、高齢の夫婦の年金で親子三人が生活していたが、気位の高い性格のせいか、妻はヘルパーに対して息子の存在は隠していた。その後夫が亡くなった後で、心を許していた訪問看護師とケアマネジャーらが連携を組んで、妻に息子さんが一緒に暮らしていることを打ち明けてもらい、一件落着いたというケースである（その後ほどなくして、息子は就職した）。

この事例では、介護サービスを利用することで、妻が息子を対外的に家族として紹介できるきっかけが与えられた。その意味で、妻と息子との関係が良好な方向に変化した事例と位置づけることができるだろう。

(2) Tさんは70代前半の男性で、結婚歴がなく、一人暮らしである。介護度は中度であり、ヘルパー派遣などを利用している。以前暮らしていた住居では隣の話し声が聞こえるような状況で居づらくなって転居することになり、その後介護サービスの利用を開始した。コミュニティカフェに来ているなかで介護度は改善した。金銭管理が難しく、社会福祉協議会の公的支援サービスを利用することになる。Tさんと関係ができていくにつれて、当初は「家族はいない」と話していたのが、最近、妹がいるので会いたいと言い始めた（あいにく妹との接触は実現できていない）。

この事例は、介護サービスを利用するなかで、高齢者本人が高齢者コミュニティでの交流に刺激を受けて良い方向に変化し、その結果としてそれまで途絶えていた家族関係を築き直す意欲が喚起された事例と位置づけることができる。

(3) N姉妹は、どちらも80代後半で、二人暮らしである。介護度は、姉は軽度、妹は中度である。ヘルパー派遣などを利用していた。姉はもともと音楽の先生をしていた。当初、二人とも結婚歴なしという情報だったが、しばらくして姉には息子がいることが判明した。姉の息子は、父（姉の元夫）と暮らしていたが、その元夫はすでに亡くなっている。妹は厳格な姉が苦手な様子で、一緒にいても気が休まらない様子であった。その後、ヘルパーとの関係ができたことで、姉妹と息子さんをつなげることに成功し、現在では息子さんは介護のキーパーソンになるに至っている。

この事例は、Tさんの事例と似ているが、介護サービスを利用することで、それまで途絶えていた家族関係が実際に築き直された事例であると位置づけられるだろう。

2. 介護をきっかけとして家族関係に変化が見られない事例

次に、介護サービスの利用を通じて、家族関係に大きな変化が見られない事例を紹介する。

(4) Mさん(故人)は、90代前半の女性で一人暮らしであった。介護度は重度で、ヘルパー派遣などを利用していた。3人の娘はそれぞれ結婚し近隣で暮らしていた。最後は24時間介護が必要な状態となり、3人のヘルパーと3人の娘が交代で介護をし、看取った。これができたのは、長女がキーパーソンになって、姉妹3人でスクラムを組んで精神面で母を支えながら、ヘルパーの協力を積極的に受け入れたからである。

この事例は、介護の前後を通じて家族関係が良好な事例である。良好な関係に支えられることで、よい看取りにつながるような介護が可能になったということもできる。しかし、介護をめぐって問題になる家族関係はこうした良好な関係ばかりではない。以下では良好とはいえない事例を三つ紹介する。

(5) Yさんは90代の男性で一人暮らしである。介護度は中度で、ヘルパー派遣などを利用している。別居している息子がいるが、この息子との関係は良くない。自立生活が可能だと本人は思っているが、実際はヘルパーの支援が必要な状況である。介護事業所と息子との連絡はあるが、事務的な連絡のみにとどまっている。本人と息子との関係が良くないために、ヘルパーの側もトラブルを起こさないように通常以上の配慮を求められている。

(6) Aさん(故人)は80代の女性で、グループハウスに入居していた。介護度は重度。もともとは息子夫婦と同居していたが、本人は家庭の居心地が悪く、ハウスへの入居を希望したという経緯があった。ハウスでは周囲との関係が良好でなかった。本人と息子は、お互いともにあまりかわりたくない様子が感じられた。嫁や遠方の娘とは比較的良好な関係があった。

(7) Nさんは80代女性であり、一人暮らしを

していたが、生活が不安なためグループハウスに入居した。介護度は軽中度、デイサービスなどを利用していた。本人は、家族はいないと言っていたが実際は不明のままである。猜疑心が強く、スタッフも最後まで信用できず、2年ほどで別施設へ移転した。

以上の三つの事例に共通するのは、子どもとの関係が存在しないか、良好でなく、そうした良好でない関係はサービス利用前後に変化していないという点である。グループハウスに入居した二つの例は、少なくともこの事例ではグループハウスが家族の代わりを提供できたわけではないことを示している。また、サービス利用以前の家族関係が良好でない場合には、ヘルパーやスタッフは本人との間に適切な関係を築きにくい傾向があることがうかがわれる。こうした事例は、介護を通じたヘルパーなどのかかわりを通じて家族関係が良好に変化しない場合があることを示しており、1の事例と対照的である。

3. 介護をきっかけとした家族関係の変化の方向性を判断しがたい事例

最後に、介護を通じて家族関係が焦点になっているものの、どのような家族関係の再編成が起こるのかが見通しにくく、スタッフもそれをどういう方向に変化させていくべきかを判断しがたい事例を紹介する。

(8) Nさんは70代女性で、グループハウスに入居している。介護度は軽度。一人暮らしをしていたが、健康面で不安になり、住み慣れたこの地域で暮らしたいということで入居した。娘は3人いるが金銭面も含めて世話にはなりたくないと言う。娘たちは金銭面も含めて本人のことを心配しており、子どもよりも本人が支援を突っぱねている印象を受けるが、スタッフは本人の意思を尊重し、本人と娘たちの関係を強めようとはしないことにしている。

(9) Mさんは90代前半の男性で、一人暮らしである。介護度は中度。資産が多いためか、猜疑心が強く、本人が介護サービスの利用を頑なに拒

み、ようやく配食サービスのみ利用できるようになった。息子がおり、息子は心配しているが、何も聞き入れてもらえないので距離を置いている。認知症の症状があり、部屋の整理が困難な状況である。

これら二つの事例では、本人が家族との関係を良好にしたいという意思を示しておらず、家族もその意思を尊重しているために、スタッフの側もどのように関与してよいのかが判断できていないという点が共通している。これは結果的に、少なくとも現時点では最善とは考えにくい介護サービスしか提供できていないという状況につながっていると考えられる。

IV. 事例からの考察

前節では、介護サービスを利用する高齢者の背後にある家族関係について、類型別に事例を紹介した。限られた事例であるうえに、研究者の立場からの議論が提示できるわけではないが、私たちの実践の経験から浮かび上がるいくつかの論点を提示してみたい。

まず第一に、III章2,3で挙げた事例からは、サービスの利用以前の家族関係や、高齢者本人やその家族・親族がもつ家族のあり方をめぐる考え方は、介護サービスの利用によって本人と家族の関係がどう変化するかに影響していることがうかがわれた。良好な家族関係がある場合には介護サービスの適切な提供が行われ、介護サービスを利用することで良好な家族関係が維持されやすくなるという傾向があるようだ。数少ない事例から一般的に論じるのは難しいが、居宅介護支援のみならず、グループハウスでもそうした関係があることが示唆される。

ここからは、良好な家族関係が良好なサービス利用につながるという「好循環」があるということができよう。では、こうした好循環が生じやすいかどうかは何によって決まるのだろうか。個人情報の関係もあり、事例紹介では詳しく述べられなかったが、私たちの実践から判断する限

り、階層による違いが小さくないと考えられる。ここで階層とは、利用可能なお金ということに限らず、高齢者本人や家族の学歴、職業、労働環境なども含んで考えている。単純化していえば、より高い階層では「好循環」が生じやすいのではないかと、ということである。居宅介護支援では、他人に家のなかに入られることに抵抗を感じるものがサービス利用の妨げになるということがよくいわれるが、階層が高く、家族の関係も良好である場合にはそうした抵抗は相対的に小さいということなのかもしれない。

この点に関連していえば、費用をめぐる自己負担の問題もあり、低い階層の人びとはそもそも私たちのサービスの対象者になりにくいという側面にも留意する必要がある。私たちが活動を展開する地域に暮らす高齢者たちのなかで、最もサービスを必要としている人びとはサービスが提供できておらず、同時にそうした人びとは家族関係というつながりからも疎遠になっているという可能性は否定できない。社会福祉の用語でいえば、アウトリーチの問題だろう。今回のシンポジウムにおける安達報告で言及された、独居男性高齢者などは、とりわけ手の届きにくい人びとであるだろう。私たちが地域密着型の活動を深めていくうえで、こうした問題にどのように取り組んでいくかは今後の課題だと考えている。

第二に、直前で指摘したような「好循環」の傾向があるのと同時に、III章1で挙げた事例が示すように、スタッフのかかわりによって家族関係が再編成、再構築されることがあることも事実である（本特集の安達論文を参照）。その点で、介護サービスの利用をめぐる生じる、高齢者とスタッフあるいは高齢者和其他の人びととの関係性の変化は、それが家族関係の変化の引き金となる場合もあることを確認しておく必要がある。

では、こうした家族関係の再構築を促進する要因はどのようなものだろうか。限られた事例からの判断ではあるが、サービスの利用を通じて起こる人間関係の変化が、住み慣れた地域のなかで生

じているということが重要な意味をもつのではないかと私たちは考える。そもそも、代々この地に住み続けてきた人びとであるからこそ、地域での相互扶助を目指して実績を積んできた私たちの活動に信頼を与えてくれているということが前提としてあるだろう。そのうえで、スタッフへの信頼が築かれたり、他の高齢者との関係が変化するなどのきっかけが与えられることで、高齢者の側でもこの地域で新たに家族との関係を築き直したいという意思が生じることがあるということではないだろうか。

しかし同時に、私たちが活動を通じて実感するのは、自分の生活の歴史があり、濃密な地域関係がある土地柄であって、それゆえにそこで死ぬまで住み続けたいと思う地域であっても、地域の間関係は家族関係の代わりになるものではないということである。私たちが今後力を入れていくつ

もりである地域密着型のグループハウスという試みは、新しい高齢者の家族を生み出す可能性を秘めているわけだが、少なくとも現状では、それは家族にとって代わる選択肢にはなりえていない。お葬式やお墓をめぐる問題で家族が強にかかわってこざるをえないことは、この背景の一つだろう（本特集の森論文を参照）。家族が看ることが困難な時代だからこそ、私たちの試みにも意義があると考えられるわけだが、地域密着型の介護事業を通じて家族と地域の新しい関係を生み出していくことができるかどうかは、今後の取り組みにかかっているということなのかもしれない。

今後私たちのような実践と、家族社会学をはじめとする家族研究、福祉研究との交流が進むことで、市民による福祉実践と研究のどちらにも意義のある知見がもたらされ、お互いの関係が深められていくことを期待しつつ筆をおきたい。